

## 児童生徒指導の実践に生かす子供の理解の意義と方法

～多職種の効果的な連携のためのアセスメント～

小山和利\*

所属：児童自立支援施設 北海道道立向陽学院

キーワード：児童生徒指導、心理アセスメント、投影法検査、グラウンデッド・セオリー・アプローチ、現象学的アプローチ、バウムテスト、ロールシャッハテスト、PF スタディー

### 1. はじめに

不登校や非行等の困難な児童生徒指導では、教師だけではなく学内のスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、更には医療や福祉の関係機関と連携したチーム対応が求められる。教育的な視点と共有可能な専門的所見が求められるが、心理アセスメントが有効に活用されているとは言い難い。実践現場の実情を踏まえ、実情に即した投影法の検査による心理アセスメントの方法と連携のあり方を考察する。

#### 1) 実践の場での心理アセスメントの実情

児童生徒指導の連携の場で、心理職に求められるのは心理アセスメントであり、心理アセスメントは主に心理検査によって作り上げられる。解説書や手引き書に忠実に従って心理検査を実施し評価することは、守るべき基本的ルールであり倫理である。心理検査に習熟するためには、マニュアル通り忠実に検査を実施できるように努めなければならない。これが心理アセスメントの大前提となる。言うまでもなく、この前提は蔑ろにしてはならない。

しかし、心理アセスメントを要する事態では、多くの場合、十分な時間的な余裕があり且つ事前に十分な情報量を与えられた状況にはない。指導に行き詰まり、混乱した実践の場では、不十分な心理検査の実施状況であっても、その限られた条件で、少なくとも何が言えるかが問われる。現場は常に不安定で不確かである<sup>(1)</sup>。検査場面という不十分な1回性の中で、その子供を貫く一般や普遍を見いださなければならない。逆に、十分な回数と時間与えられているが故に見出しにくい普遍性を、その貴重な一回性の中から見出すことが求められるとも言えよう。

#### 2) 実践の場での心理職と他業種との関係性

児童生徒指導の現場では、過去の実践記録や、社会調査や生育歴等が存在する。また、現場に携わる支援者には、非行や不登校を理解するための持論を所持している。心理アセスメント以外の情報や理論に加え、異業種間での協働によって総合的なアセスメントは作り上げられる。そのために、直接支援者が力を発揮できるような納得感が得られる心理アセスメントであることが望まれる。支援に携わるスタッフは支援のモチベーションに対しても相互依存的、相互補完的な関係にあり、相乗的に支援の意欲を高めあい、互いに力を与えあうものでなければならない。

特に急を要し緊迫した状況では、それぞれの職種が置かれている状況に応じた所見が求められる。状況に関係なく、過度に細分化専門化された長文の説明を伝えられても、他の対人援助職と協働が必要な現場実践では、支援の貢献度は低いと言わざるを得ず、自己満足で終わりがかねない。

\*責任著者

小山和利 koyama.kazutoshi@pref.hokkaido.lg.jp

### 3) 実践の場での心理アセスメントの限界

子供への心理アセスメントを必要とする事態は、子供の行動の理解や対処に方法に困難を来した時であり、既に多くの場合、話し合うことで解決を目指したが結果的に成果を上げることが難しい事態に置かれている。心理アセスメントを必要とする子供程、言葉の量に乏しく、その乏しい量に加えて単語の意味や文法を間違っている可能性が高く、そもそも表出された言語が本心かどうかの疑問も残る。このように、子供の心理世界を言葉で理解するには、二重三重の制限の可能性があることを前提とする必要がある。そして、この制限のために、多くの子供は既に日常の様々な場面で対人コミュニケーションに支障を招き、二次的に形作られた反抗や緘黙などの症状が中心的な問題となっている場合も少なくない。勝手な思い込みによる誤解と、本人には理不尽と思える他者からの注意叱責に傷付き、不信と敵意そして憎しみが高じている場合も多い。そもそも、自分が試され評価に晒される面接場面や検査場面への不信や嫌悪感を持ちやすいことを考えると、表現された言語は控えめに解釈されなくてはならない。そのため、このような子供の発達特性や置かれている状況の子供にとっての意味を無視して、表現された言葉への過度な信頼に基づく評価や解釈、テストのスコアリングは、緻密さに耐え得るものとはならないだろう。ただ、言葉が全く意味をなさない訳ではなく、共通の意味を有しつつ個人的な意味をなしているとの認識が必要であろう。そのため、言語以外の表出される行動の数々を参考にして心理世界を描くことが求められる。

このように、心理検査の限界や個人の限界の中で子供の普遍を導きだし、そして同業種及び異業種間で共通の了解に至り、相互に補い合うための心理アセスメントの方法について考察する。

## 2. 人格と意識の定義（述語的世界の記述）

現在の家電品に代表されるような日常生活の著しい利便化に比例して、人の側に求められる行為の省力化簡略化が著しい。高度な便利機能を持つテレビのリモコンが故障すれば、多くの場合、ただ強く押したり、振ったり叩いたり原始的な解決手法に留まりやすい。現代生活の高度な自動化に反比例して、身体表現の多様性の必要性は低下する。掃除や洗濯は掃除機や洗濯機の物としての性能で語られるようになった。しかし、時代が変わっても、人間関係を主とした複雑な日常生活を支えるのは、物（名詞）ではなく、振る舞い（動詞）であることは変わらない。

言葉も、本来、物の操作を目指し、物も述語の共通性類似性によってゲシュタルトとして浮上しカテゴリーとして分類される。そして、言葉も振る舞いも、特定の文化の日常生活を巧みに生きるために必要な道具であり、文化が複雑になれば成る程、人の側に操作や振る舞いの多様性が求められ、定着するには一定の修練の時間が必要である。集団に共通する行為の型の多様性や集積が文化と言えよう。そのため、行為の型が豊かで柔軟性に富む程、その文化での生活は容易となる。生活のしやすさは行為の型の多様性に依存しており、端的に言えば、知能も人格も、身体に潜在する行為の質と量で測られる。対人場面で、選択できる行為が洗練されその数が多い程に、知能に優れ人格が豊かであると言える<sup>(2)</sup>。逆に、対人場面で硬直化した手段しか持たず、選択できる数が少ない程、知能は劣り人格は貧しいと言える。対人的な困難場面で、喚き暴れる等の原始的な運動の暴発となるか、行動停止に陥る人を、知恵者、人格者とは呼ばない。

人格は行動の規則の束であり、意識は、行為を表出する前の行動選択のための内的リハーサルのものであると言える<sup>(3) (4)</sup>。

動物は文字通り生きるために動く物であり、個人が体験する心理世界は文字通り世界を体験する経験であり、心理的世界は、本来、生き方を巡る動詞的世界とそれに伴う感情が錯綜する世界であろう。そして、この述語的な世界の共有が、個々人の行為の意味を共有しうる可能性を支えていると言える。動詞の多い文章は分かりやすいと言われる所以であろう。

ここでは、投影法検査から見える動詞的世界の既述を主に、非行や不登校等の症状の背景に潜む子供の心



理世界の理解と分析、そして異業種間の共通の理解に至るため、児童生徒指導の現場に役立つ心理アセスメントと連携の方法について考察する。

対象とする検査は、バウムテスト、ロールシャッハテスト、PFスタディー、厳密には投影法の範疇とはいくいが、ベンダーゲシュタルトテストに共通に流れる運動感覚の記述と分析をベースに、子供の心理世界を組み立てる作業を試みる。

### 3. 投影法検査による述語的世界の質的分析

投影法の心理検査は、子供の心理的な世界に近づくための貴重な事実を提供する。その事実の意味を見だし共有するためには、検査を実施する側に、投影法検査に共通する特徴及び解釈するための共通する方法論が必要となる。

投影法検査を、前述した述語的な視点で大雑把に定義すれば、巧みに構造化された場面で表出された行動を通して、日常の行動特性を探る道具と見なすことができよう。そして、その限られた一回性の中に如何にして子供の行動の普遍性を見いだすかが投影法検査の存在意義と言える。

自由な検査場面での一回の検査では、客観的なデータの乏しい一回性故に恣意的な解釈も自由であるとの批判を浴びやすい。しかし、一回の検査であっても無数の行為で構成され、その一つ一つの行為は無数の可能性の中から選ばれている。

例えば、木の自由描画を求めるバウムテストで描かれた絵は、完成に至る過程を様々な行為に分解できる。描画を行為の選択と考えれば、取り得る様々な行為の可能性の中からある行為が選ばれ、その行為が選択されることで他の行為は選択されない。一つの行為を選択するという行為は、他の行為を選択しないという行為でもある。そして、その行為は、強さや方向や持続性や変化等々様々な潜在的な可能性があるのにも係わらず、特定の行動は選択される。そのため、取り得る行為の可能性を、行為の質で分類し、その中で選ばれた行為の態様を整理し、概念を抽出しデータとして整理することが可能であろう。

グラウンデッド・セオリー・アプローチは、インタビューの一次情報をできるだけ細かく分解（切片化）し、その一つ一つに概念を抽出（オープンコーディング）し、一段一段階段を上るように抽象度の高い言語を付与して概念化を繰り返し（カテゴリー）、それらの概念の関連を考え最終案を創り出す研究上の方法論である。グラウンデッド・セオリー・アプローチの主な分析対象は言語であるが、その方法を投影法検査に汎用して、投影法の検査結果を質的なデータとして収集・分析も可能と考えられる<sup>(5) (6)</sup>。

例えば、バウムテストの空間占有での、位置、大きさ、方向や、運筆を行為の特性として細分化し、その視点の中で選ばれた態様を位置づけ、そのデータを抽象語に置き換えていく作業を繰り返すことでデータとして収集される。このデータの収集が、その後の解釈の根拠となる。この方法に従えば、木を描くという描画は、例えば、大きさや太さや速さというプロパティ（視点・属性）に分けられ、それぞれが大きく薄く早くというディメンション（選択・位置づけ）という態様となり、拡大や萎縮や拙速等のコード（概念）に分類評価できる。

バウムテストにおける解釈として、木を、「太く、強く、紙面一杯」に描くと、一般に自信家であると解釈される。しかし、自信家であるために、「太く、強く、紙面一杯」に描く訳ではなく、「空間、方向、濃淡」（プロパティ）の視点に、「紙面一杯に、広がる、強さ」（ディメンション）と位置づけ、「全面、拡大、強靱」（コード）とラベル化され、最終的に「自信」というカテゴリーに概念化するという流れが明瞭となる。

バウムテストの解説書<sup>(7)</sup>でも、この一連の作業が行われていない訳ではないが、解釈のために、この一連の作業を根拠としていない。そのため、検査を実施する側にも、結果を聞かされた側にも解釈の恣意性や飛躍感が拭えない。素朴に行動の評価を繰り返して、概念化を重ねる毎に、データと解釈の連続性を体感で

きる。そして、子供の掛け替えのない個々の子供の本質的な行動特性と、その行動の意味に近づくことが心理アセスメントの最大の目的であると言えることができる。無論、子供の経験する世界を、正確且つ完全に記述することは不可能である。心理検査の結果は表出された行動から導き出された仮説であり推測に過ぎないからである。

また、一般に、テストバッテリーはパッチワークのように、各心理検査の足りない所を埋める作業と考えられやすい。しかし、ここで用いる基本的な方法は、パッチワークを完成させて鮮やかな平面図を描くのではなく、心理検査から見える心理世界のアウトラインを描き、続いて実施する他の検査のアウトラインとの共通の像を浮き上がらせる作業である。そして、検査を増やす度に、更に仮説の確からしさ増していく方法と言える。

この作業を通じて、1つの心理検査の仮説がより確からしい仮説となるか、検査間で生じた矛盾したと思われる結果を包摂する仮説に修正される。実生活で生きる固有で具体的な生活体として、優先される選択行動の規則性を鮮明にしていく作業と言える。この手法は、細部への曖昧さは残るが、荒削りながら生活者としての子供の全体像を確かに捉えることができる。ダイナミックな子供像の共通理解が、支援の意欲や異業種間の連携の質を高める端緒となる。

そして、そのような行動原理が子供の心理的体験世界でどのような価値を帯びるのかを探る。一つの心理検査は検査場面という文脈と結果という行為から成り立ち、行動原理と生活者としての意味や価値を見いだすために、既存の知識で解釈することを保留し、検査で推測された解釈の確信成立の根拠を示すという現象学的還元の手法を用いる。そして複数の心理テスト間で、その確信成立の根拠の照合を繰り返すことによって還元の質を高め、個々の子供の心理的な体験世界に近づくための記述を試みる<sup>(8)</sup>。

#### 4. 心理検査の実際

##### 1) ベンダーゲシュタルトテスト

図形を模写させる検査であるが、図形は巧みに選ばれており、模写を通じて図形をどのように知覚的に分解構成するのが明らかになり、基礎的な神経学的な成熟度及び文化的な習熟度を測ることができる。細かな運筆には、神経系の成熟が必須条件であり、その未成熟は文化を受け入れることの制約となり、またその制約が文化的な行為の習得の準備の妨げとなり、文化的な孤立という状況を作り出す。前述したように、文化は特定の文化の中で共有される行為の型であり、文化の中で生きていく上での約束された行動と言える。例えば文字という行動パターンとしての約束事は、子供の側に、文字を構成する部分に分解した行為と、それを組み立てる統合能力が必要となる。まさしく全体は部分以上とするゲシュタルトである近接要因などの個人差も際立つことになる。

このテストも、感覚から運動、そして文化的な表現形式の発展という身体から言語への発達と同じ視点から評価することができる。

- ・認知レベルでは知覚精度、知覚特性、記憶方略、作業企画
- ・行動レベルでは微細な運動のコントロール
- ・情緒レベルでは安定性、注意や集中の高さや持続性
- ・性格レベルではバウムテスト同様に、空間象徴、動態分析

等の評価が可能であり、様々な視点が集約されている。バウムテストと異なるのは、描画における自由度の制限である。自由な描画であるバウムテストに比べて、手本が提示されるために為すべき作業が明確であり、行為の選択の自由という不自由に困惑しやすい子供にとって、受け入れやすい検査でもある。ただ、求められる作業が明瞭になっている分、失敗したかどうか明瞭である。この失敗の露見を警戒する場合、明瞭さの低減を目指して縮小や弱圧が起きることが考えられる。

そもそも、知覚の精度に劣れば、角の省略等の曖昧化による単純化が起きざるを得ない。また、複雑な根気のいる作業や継続的な安定した作業を嫌う場合、或いは耐えられない場合には継時的に作業レベルの低下が急速に起きる。映像的な記憶に優れ正確さに拘る場合や、映写的な精度を過度に優先した知覚特性を有する場合には、作業行程を簡素化した表現の大まかなパターン化が難しく、ゲシュタルトの崩壊が起きやすい。数や形等の概念化や行動パターンの組み合わせによって記憶保持に威力を発揮する。

例えば図1であれば、「3個の丸、斜め、平行、等間隔、11列」といった概念化や行動パターンの組み合わせにより、記憶容量の節約が可能である。



図1 ベンダーゲシュタルトテストのⅡ図版

逆に概念的統合的な記憶方略を欠けば、コンピューターの画像の保存データが重くなるように、必要以上に細部に拘り非効率的な記憶と非効率的な再現を強いられる。このように、体の動きに分解した見取り図がないと、原図との確認照合作業を執拗に繰り返さなければならない。一般に、全体のデザインという大まかな動きの正確さを優先し、徐々に細部の正確さへという正確にすべき優先順位や間違いの程度の軽重の基準が分からず、過度に細部に拘って修正を繰り返し、結果的に全体のデザインが大きく崩れることにもなる。社会的不適応行動を示す子供の多くは、図1の概念的な整理では、3個という個数が盾に並ぶという程度で、作業中にデザインは崩れてしまいやすい。このように、知覚レベルと身体表現レベルの習熟度に相応の関係性がないと、原図との視覚的な照合の繰り返しの陥る。解像度の高い映写記憶を可能とするワーキングメモリーを持たない限り、視覚的情報に頼った作業の維持は、活動性の高い子供にとっては苦痛や苛立ちを伴うことになるだろう。

実際の子供の模写である図2を分類整理すると表2のようになる。

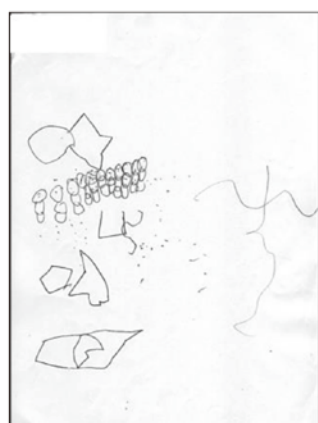


図2 子供のベンダーゲシュタルトテストの事例



表1 図2の行動分析による結果表

プロパティ(属性)	ディメンション(決定・選択)	ディメンション(抽象化・概念化)
大きさ	原図とほぼ同サイズ	大まかな同一性
配置の計画性	概ね上から下	大まかな規則性
配置間隔	接触重なりあり	関係性の無頓着
継起	短時間だが変わらず	短時間集中
筆圧	強い	確たる表出
速度	きわめて早い	性急、躊躇わない
統合	重なり、分離頻発	関係性の無視、無頓着
角	鋭角化	先鋭
	方向転換頻繁	両極性
数	正確	数への執着
図間の関係性・規則性	一部のみの規則は維持	単一の関係性
	重複した規則性の把握困難	重複への無頓着

そして、表1のコード化された概念をまとめると、

「作図に、大枠として一定の規則性一貫性がある。社会的な大枠の規制は、ある程度受け続ける。しかし、個々の模写作業は短時間に集中。図間の関係性に無頓着。初発に躊躇わず、その後も行動を瞬発的に強く表出し続ける。動いた直後に間違いに気付き、極端な咄嗟の修正も繰り返す。激しく揺らぐ。そのため丸みがなく終始鋭角的に動く。」となろう。

## 2) バウムテスト

木を描くという素朴な課題であるため、誰でもその実施や解釈に参画できる。公共性の高い検査と言うことができるが、誰でもコメントできる分、解釈に注意深さや冷静さが求められる。バウムテストを行うテスト場面の文脈は、多くの場合、緊張場面・圧力場面での自由画の強制である。自由の中では、様々な空間的、時間的、行為的属性が存在し、様々な取り得る選択枝が存在する。その中で様々な取捨選択が行われた過程として評価することとなる。

### (1) 空間占有

「紙面に収める」という無言の規制を、受けることも受けないことも自由である。そして、空間のどの位置に木を配置するかも自由である。中心に描くことも紙面の端に付置することも自由である。しかし、多くの子供は無言の社会的圧力を感じて、枠組みの中に収まるように無自覚的に行動を規制する。日本の教育ではマス目に収めるという文化的教育的な規制は強い。その中で敢えて逸脱も辞さずに大きく描くことも、反対に、過度に小さく描くことも選択が可能である。

一般に利き手の方向が身を構える方向であり、非利き手よりも身体を庇うために戦う方向であり、その逆が身体影の部分であり弱点となる対称性がある。そのため、地下通路等の不安な場所を歩く場合、自然に利き手とは反対の側を壁に沿って歩くことと共通するだろう。

紙面の上部の逸脱は、無言の枠組みに無頓着であるか、意識的な逸脱と考えることができる。単に見通しがなく逸脱する場合は、紙面上部で詰まり急速にブレーキがかかる。迷路の行き止まりで急ブレーキをかけ急反転するのと同じであろう。左右の方向のみの逸脱は、次に記述する空間位置とも関係するが、意識的な隠蔽を含むため、肥大による逸脱とは異なる視点が必要である。木の左右半身しか描かないことは、半身し

か晒さないという強い意志の潜在も窺える。水平方向の逸脱は、自己表出の躊躇いと同時に単なる拡大とは異なると考えられる。

普通、地面を離れ上部に行く程に、浮動感覚が強い或いは自分から離れた遠方への志向性が窺える。逆に、紙面下端は、描く私の中心に最も近い位置であり、社会的な広がりや制限され限定された空間に付置したことになる。サイズの萎縮が重なれば、自らを限定させる傾向をより鮮明にすることになるだろう。

木を描く方向や順序も、バウムテストの解釈の重要な視点となる。利き手が右の場合、日々の生活体験が積極的肯定的な心理状態ほど、身体は開かれ、下から上、左から右が自然な行為の発露の方向である。社会的な圧力を感じない重力感の乏しい生活ほど、描画の中心は増幅拡大としての成長の最終部分すなわち冠か枝が作業の中心となる。逆に根の強調は、下方への意識、依って立つべき場への意識の強さであり、すなわち下方に注意を払わざるを得ない依って立つ場の弱さを逆説的に示すことになるだろう。空間占有で記述したように、木を紙面の下部に配置し根を強調しすぎる場合はその傾向を露わにする。

## （２）動態分析

言うまでもなく描画は必ず動きを伴う。手を出さない場合でも、動かないという動きを選んだと言える。筆圧の強さは行為の安定と関係する。特に、行動指針が確たる程、輪郭線は太く動きは安定している。表現することに強い自信や覚悟が窺える。鉛筆の芯が折れそうな程の強さは、抑えきれない情動の激しさであり、情動の多くは怒りである。

逆に線が薄い程、行動に確信がなく、見えない位の薄さは存在の薄さであり、存在を露にすること、目立つことを極度に恐れていることが推測される。多くの場合、目立つことは称賛を得ることではなく、攻撃されることの始まりと恐れている。注目されることは、悪いことが起きる前兆とであり、目立たないことが最も安全であると感じている可能性が高い。輪郭を明確にすることで他者から差異を明確にすることであるとすれば、輪郭線の薄さは、それを隠し注目されないよう存在の希薄さを示すことになる。線が薄く波を打つ場合は、自らの基本的な自らのあり方を明瞭にすることへの警戒が窺えよう。波線は幅を持たせたクッションの役割となる。輪郭線の微調整に時間を費やされるほど、自らの行動を定められず外界に自分を晒す不安を伴う。複数の線を重ねた太い輪郭線は、晒すことの不安を明瞭にすることになるだろう。自分への不用意な低評価を防ぐための警告と言えるかもしれない。また逆に、破線は、輪郭のヒントしか与えない行為、相手の推測や配慮を期待する行為と言える。積極的に不安の表明よりも出来れば透明でいたいとする心性が窺える。消えることは、透明人間のように攻撃から自分を守るための究極の防衛であろう。しかし存在そのものを消すこともできない。

速筆は、決断の早さと同時に与えられた作業を蔑ろにする心性を窺わせる。選択枝が乏しい意識の単純さも暗に示す。遅速は、表現自体の恐れであり、また表現することの過剰な選択枝に悩むことでもある。状況の判断力にも影響される。

連綿な線を繋げいくら大きな木を描いても、薄い連綿とした輪郭線が自己の弱さを露呈する。実態のない虚勢であり、自己の強さを誇示することに汲々しなければならない追いつめられた状況を示唆する。円冠の場合は特に作戦性の乏しさを示す。単純であることは間違いの幅を少なくする最も安全な行為と言える。小ささと筆圧の弱い連綿な線が伴えば、自己の脆さを露わにすることになる。

## （３）構造的性

年齢や知的発達が進むほど、木は枝や幹に分化し、構造物は豊かになり、各部品はバランス良く組み立てられて行く。知的発達が進んでいる筈なのに単純化させるほど、余計な自己表現への警戒である。

単純な構造しか持たない場合や、幹の輪郭線がそのまま一本線の枝になるような不合理性を無視した描画は、概念の階層的な矛盾に気が付かない或いは気にしないことと考えられる。また、上下逸脱の幹に左右の棚状接木も規則の一面性や硬直性を示す。知的活動の限界を示す。

#### (4) 内容

果実は即物的な充足を願う志向性が反映する。加齢に伴い露わな欲求は表に出さない。露わな欲求を出すことに躊躇わないのは幼児である。実が大きくなるほどその傾向は強まる。

葉の重責は石を積み重ねる切ない思いと重なる。細かな行為の繰り返すことは完成されたものへの承認評価だけではなく作業過程の承認評価の願いである。

実際の描画である図3を評価すれば表2ようになるろう。

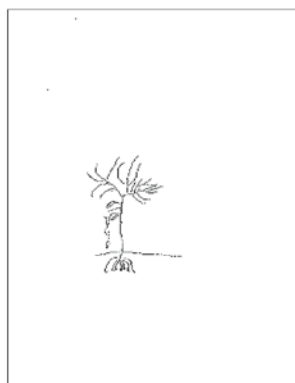


図3 子供が描いたバウムテストの事例

表2 図3の行動分析による結果表

プロパティ(属性)	ディメンション(決定・選択)	コーディング(抽象化・概念化)
位置	やや下方	やや消極的退却
	やや左側	やや消極的退避
大きさ	とても小さい	僅かな空間占有
線の太さ	一本線	細く、弱く
線の数	多い	手数
筆圧	弱い	力の抑制
筆量	少ない	量の抑制
筆速度	早い	拙速
潤渇	渇く振るえ	未熟小心
継起(ペース)	短時間だが変わらず	短時間集中 慌ただしさ
枝方向	全方位	散漫さ、無方針、無定位
構成度	低い	多様性複雑性の乏しさ
力点	根の密集	下方、安定への志向
運動	枝の追加付加	付け足し 迷走
	葉は落下	重力感 下方への力

そして、コード化された概念をまとめると、

「中心から外れた僅かな部位に定位。上方からの重力感、周囲からの圧迫を受け。方向性乏しく、弱々しく迷いながら慌てて書き上げる。拙い細かな動きの手数が多く散漫である。全体としての量感や力強さ多様性も抑制され、素朴な萎縮が際立つ」となるろう。

#### 3) ロールシャッハテスト

ロールシャッハテストは、曖昧な刺激図版を与えて、子供がその刺激をどう捉えるかを探る検査である。検査に用いる刺激は偶然できた紙の染みであるため、曖昧である分、何を知覚するか自由度が高い。ただ、一般に心地よい刺激とは言えないため、生活での負の心理的体験が投影されやすい。曖昧であること、即ち



対象の明瞭性が揺らぐ程に、人は恐怖体験を重ねやすい。人にとって、未知の事象から自分を守るために、逃げるかどうかの敏速な判断が生き残るための最重要課題であるため、初発の反応時間やカードの距離にその程度が現れやすい。危機感が切実な程に、初動の行動に差が出る。中々手を出さないのは侵襲の具合を探っていることであり、即座にクルクルとカードを笑顔で回せる程、カードから受ける圧迫や侵襲性は弱く、安易な操作対象としてのカードの物性が際だつ。このように対象と距離をとらない状態は、いわゆる自然な警戒感の弱さと解釈されよう。

また、シミであるとの事前の説明があるのにもかかわらず、「シミ」或いは「絵の具」という反応は刺激を刺激そのままに留める反応である。曖昧さへの対処の術が乏しい状態を示唆する。知覚することの困難さか表現することの困難さかを見極めなければならない。また不快感を露わにするような、刺激を圧迫の質の程度に留める反応は、PF スタディの困惑反応（E'）と同質である。視覚として形態を捉える対象は、線であり色であり形である。その形に何物かを知覚できず材質を感じる場合、触覚による原初的な質感である感覚世界に留まることを意味する。人は知覚するために動き、動くために知覚するという言い方が人の生きる根本的な姿勢<sup>(9)</sup>であろう。

#### （１）反応領域

バウムの空間占有と似ている。全体反応は決定に躊躇わないほど、全体として捉える側の知覚的な安定性は高いが、同時に紋切り型の硬直した認知特性とも言える。逆に細部に反応を量産させるほど知覚スタイルは浅く狭く落ち着かない。Wカットや特殊部分反応は、自己都合による反応決定であり、図地の一般的な把握が難しい知覚認知上の問題があるか、文化的規制に無頓着であることを示唆する。留意しなければならないのは、評価する側が部分と評価しても、部分を見ている側が部分と必ずしも知覚してはいないということである。知覚する側では、部分が知覚全体を占め全体となっている。細部に没入しやすさを窺わせ、バウムテストの紙面一杯の木は、自己の拡大というより自己の没入と解釈するほうが良い場合もある。

#### （２）反応決定因

ロールシャッハテストの分析解釈に際し、最も重要な視点となる。

##### ① 形態

形態特性による知覚決定は最も一般的な対象把握の方法である。知覚方法の公共性や一般性を示す。対象知覚に最低限の合理性を保証する。短時間での無難で圧倒的な形態反応は、ありきたりの決めつけに終始する傾向を示す。

##### ② 運動

ロールシャッハテストに運動的な知覚が出来るかどうかの識別が最も重要である。図版は描かれている図柄は単なる「シミ」であり、カードは一枚の完全な静止物である。更には世の中に全く同じ画像として存在することがない映像であるにも係わらず、「シミ」に運動を感じることは自体が不思議であるが、運動反応が一つでも出現すれば運動の体感的な知覚が可能であるといえる。大切なのは、運動の言葉ではなく、体感的な運動の深さである。バウムテストの動態分析であり、PF スタディーの自我防衛のための対人対処の方向性と関連づけることができる。

自分の身体に準備された様々動きを他者に重ねるといふ相手の身に自分の身を重ねる理解の方法は、素朴な他者理解のための共感の原型である。児童生徒指導の対象となる不適応の子供の多くは、動作を起動しない或いは動作を起動する前に知覚対象の決定や限定が素早く起こることが多い。動物の顔やコウモリであり蝶であり怪獣で終了しやすい。ただ動物には僅かな動作を準備している場合が想定されるが、枯れ葉や花瓶にはそもそも動きは存在しない。化石や枯れ葉は動きを失った死に象徴される無力感を窺わせる。

生物としての躍動感が無生物に強烈な運動を感じる場合は、自分ではどうやっても操作できない或いは関与できない巨大な力を感じている。全く抵抗できない力による制圧や恐怖による無力体験はこのような生

活の構えをつくる。滝や巨大な物に力を感じる場合は、その色彩が強くなる。

また動物運動反応は、制御されない文化的な規定の低い衝動的な運動性を示唆する。受動か能動、激しさ、力の方向性で運動の質を考える必要がある。

逆に、運動が繊細であるほど、刺激は身体に深く全身に浸透しており、刺激の接触水準は細かく末端に至る。それは文化を吸収でき文化を共有する能力と言える。表3の反応を分類評価すれば表4となる。

表3 子供のロールシャッハテストの事例（片口法スコアリングによる）

カードNo	反応	スコア
I	変な女の人2人手を挙げて	W M H
	コウモリの顔	W F Ad
	ぶん殴られてる人	dr M H
II	変な鳥が2人向かい合わせ	D F A
	赤い顔の人が手を合わせて座ってる	D M H
III	禿ツルの人がカツラ取りあっこ	D M H
IV	怪物	D F (H)
	火の玉	D FC Fire
IV	魔女が手を横に服をバアー広げている	W (カット) M (H) obj
V	魔女の手下の鳥	W FC A
VI	キツネが飛び跳ねている	W FM A
VII	女の人2人が顔合わせて逃げてる	W M H
VIII	変な動物が登ろうとしている	W M (H)
IX	魔女はコップに入れた物を煮ている	W M (H) A obj
X	変な王様	D F Hd

表4 表3の行動分析による結果表

プロパティ（属性）	ディメンション（決定・選択）	コード（抽象化・概念化）
初発	即座に反応	躊躇しない
回転	時々	自由な対物操作
継起	後半失速	飽き
反応領域	やや全体優位、大きく偏らない	部分全体を取り分ける
	領域の自己納得的裁断	形態的な厳密さに拘りが弱い
反応決定	運動把握多用、過激な運動	衝動と攻撃的エネルギー
	色彩乏しい	強い情緒的不安定はない
反応内容	魔女が多数	非現実的イメージ
	変な・・・	形態的な厳密性乏しい 不穏な非現実性
	戦い	観念的闘争

コード化された概念をまとめると、

「曖昧さの決定に躊躇わない。知覚領域の決定に頑なさはない。熟慮せずに自己納得的な内容決定と、高い衝動性を窺わせる。漠然とした恐れと、恐れと対決する心理的な生活体験が推測される」となろう。

#### 4) PF スタディー

PF スタディーは、ロールシャッハテスト等の投影法と異なり、より現実的な状況から子供の反応を引き出して、子供の性格行動を探る検査である。全て圧力となる場面が準備されており、子供の日常的な刺激圧を用いてアグレッションの反応パターンを評価し行動スタイルを探ることが出来る。他の検査とは異なり、既に行為としての評価が前提となっている。

PF スタディーは、表5のように3×3の巧みに作られたマトリックスの評点因子で評価される。反応は、横軸である三種のアグレッションの型（障害優位、自我防衛、要求固執）と、縦軸である三種のアグレッションの方向（他罰、自罰、無罰）の交点に付置される。検査の解説で示す分類は、以下のような防御反応で分類され、その数での説明となる。防御の特性から子供の性格を探るには有効な検査であり、具体的な生活場面での評価となるために異業種間での子供の理解の共有に役立つ。

表5 PF スタディーの現象型不満反応の分類表<sup>(10)</sup>

	障害優位	自我防衛	要求固執
他罰	困った事態だ(E')	おまえが悪い(E)	相手に後始末してもらう(e)
自罰	どうしよう。全く何ともない。却って良かった(I')	自分が悪い(I)	自分で後始末する(i)
無罰	大したことではない(M')	それはやむを得ないことだ(M)	自然の成り行きに任せる(m)

このような理論の枠組みの中での位置づけとなるが、ここでは、前述の行動の対象、方向性、その強弱と方法で行動特性の図式化を試みる。

縦系列の他罰から自罰そして無罰への三つの特徴の違いは、発達に伴う自己中心化、脱中心化、そして無中心化という行為の方向と同時に、直接的な関与から間接的な関与へとスライドする割合の違いでもある。

横系列の障害優位、自我防衛、要求固執は、自分から外に向けて行為としての共通性を持ち、それぞれ対場面、対人、対物という対象性と同時に心理的な関与の高低によって布置される。

他罰は、場面では困惑や嘆き、対人では他者そのものを攻撃し、対物では他者を操作して物を所有するという執着の表現をとる。場か、人か、物かと対象が異なるだけで、支配するか支配されるかの関係性を表しており、対象と殆ど距離のない事態或いは距離を無にする或いは極力縮めようとする行為である。このように障害優位、自我防衛、要求固執は、それぞれ、場面の支配であり、相手の支配であり、物の支配（所有）とすることが出来る。

縦軸の型の視点は、他罰は直接的な支配を目指し、自罰は、自らの問題として、自ら距離を広げることで問題を終結させる方法であり、無罰は、保留や慣例に従う行為であり、距離を排除する或いは距離を感じて自分を放つという距離上の選択ではない。距離を感じて向かうか引くかの行為の方向性ではなく、その人の意思を超越して集団や社会の意思に従う行為と言える。事や物から私と貴方という次元を脱してしまうことと言える。概念発達の言え、自分や他者との対立を乗り越えるための、より高度な包括的な概念発達が求められる。ただ、問題を取りあえず遠ざけることで自己の関与を否定する行為でもあり、単なる怯えであれば無罰が必ずしも高度な選択肢とは言えない。

3×3のマトリックスに整理すると、障害優位は場面依存的な解決方法であり、E' は場面に翻弄され、I' は場面の意味を変え、M' は場面を否定無視する行為であり心理的な距離の長短で語られる。そして、E は他者への直接的攻撃であり、I は自己を他者から離れ他者を宥めることであり、Mは自他を意識しない行為と言える。同じようにeは、直接そして他者を使っても所有を実現しようとする執着的行為であり、iは



自分の問題として自力による解決を願い、mは慣例に埋没させ物や事を縮められない距離として諦める行為と言える。以上のような傾向を整理したものが表6である。

表6 PF スタディーの行動分析による分類表

志向	場面	人	物
支配	場面の支配(E')	他者の支配(E)	他者を使って物の支配(e)
操作	場面の操作(I')	自分の操作(I)	自分を使って物の操作(i)
超越	場面の超越(M')	自他の超越(M)	物の関与に自他の超越(m)

PF スタディーは他の投影法とは異なり、模範となる行動の知識があれば、本音を隠すことができる。ただ、公式に取るべき行動の知識があるだけでも、また本音を隠すという行動の選択性が広がったことであり、同じような事態の対処の可能性が広がったことになる。しかし、他の投影法検査との解釈に大きな剥離がある場合は、多くは機械的な自己規制や追従によるため、人格としての安定性や生活の汎用性は無理な自己抑制のために低いと考えられる。児童自立支援施設での心理アセスメント上の変化は、PF スタディーに顕著に現れる。挨拶などの目に見える行動の変化を求められるための成果と言えるが、外圧的な枠のために性急な変化に内面の変化が伴っていない場合がある。バウムテストやロールシャッハテストの変化にはPF スタディーよりも一般に時間を要する。このような剥離は、無理な自己変容を強いられる体験でもあり、変容に伴う不全感などの心情を考慮する必要がある。

このようなマトリックスの一般的な分析による評価以外にも、留意する視点が必要である。前述したように、場面の理解や言語の理解に個人差があり、共通の前提にはなりえない。社会不適応に至る子供の多くに、絵のイメージに依って態度を決定する場合が目立つ。特に場面16の刺激文である「あなたのボールをとったりして、この小さい子はいけないわね」を相手からの攻撃と感じて自らの加害性を強めてしまい、被害的な立場にあるにもかかわらず加害側にたつて謝罪を表現する子供が多い。「あなた」「ボール」「とった」「いけない」の単語に反応し謝罪に至る場合が少なくない。単語の羅列から想起されるイメージに依る即座の判断に至りやすい。このような、現象世界は被害的な前提、助詞の適切な文法的な理解の難しさ等が背景的な要因と考えられ、日常生活でのコミュニケーションの稚拙さと限界が認められる。幼児の面接では、重文を用いたマルチ質問を避けること、そもそも長文を控えることは、社会適応上の課題を有する児童との面接で欠くことの出来ない前提である。

## 6. まとめ

心理アセスメントは客観的であることを目指す。混迷する現場で、客観的根拠に基づき少しでも科学性を付与するものでなければならない。そのため、統計的な手法に基づく量的分析に根拠が求められる。しかし、検査はいつ中断されるかわからず、子供の示す行動は安定しない中で統計的な要因分析は困難となりやすい。また、保護者や関係者の置かれている状況も変化し続ける。支援のニーズも変わる。動き続ける対象の重さを量るような難しさを抱え続けることを避けることができない。

このような現場の不安定さの中で、子供をどのように捉えるか、困難な心理実践に携わる人は問われ続け、それに応えて行かなければならない。多様な要因の構造的な分析と因果関係の実証的な証明に資する所見を出すために、検査の一回性において如何に普遍に接近するかの手法を探る必要を痛感する。仮説に論拠を求め、仮説間の照合と修正を繰り返して、仮説の確からしさを高めるという方法論が求められる。

言うまでもなく、子供の心理的な体験世界は直接見ることができないため、その世界を探る作業は容易で

はない。そもそも心の問題を扱う難しさに加えて、その世界を探るツールとしての言葉が未熟であったり異質であるために、探る道具として不完全であるからである。そのため、表出される言語を含めて表出される全ての行為から、内面を探るしかない。子供は行為によって固有の個を生きる。どの子供も一人称で生きている。そのため、子供を観察対象とした客観主義に偏重した三人称で語る子供像は、生きた対象として際立たず本質を掴みにくい。ダイナミックに動く子供の内面世界を既存の投影法検査を用いて把握することを試みた。

投影法検査は、恣意的な解釈の押しつけや主観的な理解に至ることから逃れられないとする批判が付きまとう。その曖昧性を補うために、一回の検査結果を複数のデータに断片化し切片化し、その分類されたデータ結果から心理世界を描くために、グラウンデッド・セオリー・アプローチは魅力的であった。一段一段抽象化の階段を上がり概念関連図としてまとめる方法は、現場の心理実践には極めて実効性の高い方法に思えた。投影法の心理検査を通じて、個としての子供の心理的な体験世界を見出す作業が、一人称の世界に最も近づく作業であると思えるからである。

児童相談所では、ケースワーカーによる社会調査所見、一時保護職員による行動観察所見、心理判定員による心理所見の3つの柱を基本として総合所見としてまとめられる。行動観察所見と心理所見の違いは、その時間の長さとの質の違いと言える。端的に言えば、行動観察は、長い時間のスパンで繰り返す日課の中で子供の行動の規則性を把握する作業であり、心理アセスメントは、短い時間の中で一回限りの構造化された場面での行動から、子供の行動の規則性を探る作業となる。行動の質という縦の一般化と、時系列という横の一般化という違いと言える。心理アセスメント、短い動画を細かく深く分解して紡ぎ出される意味や価値の心理世界を記述することであろう。そのことがチームでの支援行動の連帯感や一体感を強めると考えられる。

## 7. おわりに

不適応で困惑する子供を素朴に理解したいと思うが、子供が実際に体験する世界を記述することの困難さに日々直面する。細かな要因分析は、データ駆動型の説明として適切であっても、特性を切り貼りしたコラージュのようで、日々生きる子供を把握できた実感が得られにくい。データの量による納得ではなく、人が何かに向かって動き出す時の筋肉の感覚のように、子供と向き合う支援者の力となる心理世界の記述を求めた。その意味で、看護実践における現象学的研究は示唆に富んでいた<sup>(11)</sup>。現象学は、個が内面的に経験し生きる世界を解き明かす方法論であり、あらゆる支援職が汎用すべき根本的な姿勢であるとの確信は強まったが<sup>(12)</sup>、同時に質的研究の方法論的な検証の弱さも露呈することになった。厳密な方法論的な検証を経ないままの、不十分な現象学的アプローチに留まり、現象学の中心的な姿勢である解釈の恣意性の排除に反している<sup>(13)</sup>のではなかいかとの危惧は常に頭を離れない。そして、一つ一つが投影法検査における分類の体系化とコード化の安定、適格性が妥当であるかの疑問も残る。結果的に、十分に整理できないままの仮説の記述に留まってしまった。今後も方法論的な考察を深めたい。

## 参考文献

- (1) 金井壽宏・楠見 孝(編). 実践知. 有斐閣. 2012.
- (2) 佐々木正人. アフォーダンス入門 知性はどこに生まれるか. 講談社. 2008.
- (3) 市川浩. 精神としての身体. 勁草書房. 1975.
- (4) 市川浩. 「身」の構造:身体論を超えて. 青土社. 1984.
- (5) 木下康仁. グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い. 弘文堂. 2003.
- (6) Saiki-Craighill- Shigeko. グラウンデッド・セオリー・アプローチ概論. 2014.

- (7) コッホ, バウム・テスト, 日本文化科学社, 1970.
- (8) 佐久川肇他, 質的研究のための現象学入門:対人支援の「意味」をわかりたい人へ, 医学書院, 2013.
- (9) 三嶋博之, エコロジカル・マインドー知性と環境をつなぐ心理学, 日本放送出版会, 2000.
- (10) 林勝造他, P-F スタディー解説, 三京房, 2006
- (11) 西村ユミ, 語りかける身体ー看護ケアの現象学, ゆみる出版, 2001.
- (12) リー・ナミン, 現象学と質的研究の方法, 2009.
- (13) 榊原哲也, 看護ケア理論における現象学的アプローチ:その概観と批判的コメント, 2008.